

令和 7 年 12 月 22 日

カメラが「再現」を終わらせたように、生成 AI は人間を「意味の管理者」にした

今日は“実務”ではなく、時代の話をしてします。私たちが立っている場所そのものが、いま静かに、しかし確実に変わりました。

カメラ・オブスキュラの登場は、絵画から「正確に描く」という役割を奪いました。その瞬間から、美術は「再現」を手放し、「意味」へ向かいました。マルセル・デュシャンの作品『泉』は、その転換を象徴する出来事です。目の前に置かれたのは作品ではなく、問いでした。「これは芸術なのか？」と世界が考え始めた瞬間、時代は切り替わったのです。



「泉」 マルセル・デュシャン

解説：「《泉》は“作品”というより、“世に問いかけた事件”であった。」

この作品は 1917 年、マルセル・デュシャンのレディメイドとして知られる。男性用の磁器の小便器を横に倒し、“R. Mutt”と署名して「Fountain（泉）」と題したもの。この作品が象徴的なのは、便器そのものより **「芸術とは何か／誰が決めるのか」** という制度や概念を問い直した点で、現代アートの出発点の一つとよく説明される。

そして今、同じ種類の転換点が来ています。それが生成 AI です。

生成 AI は、文章を書き、要約し、画像を作り、アイデアを出します。つまり AI が自動化したのは、手先の作業だけではありません。人間の営みの中で最も根源的な部分——思考の「初動」を、AI は肩代わりし始めました。

ここが本質です。「できる／できない」ではなく、世界の前提が変わりました。この瞬間から、人間の役割は変わります。私たちは、技能を誇る存在から、意味を引き受ける存在へ移行します。AI は、いくらでも表現し、いくらでも提案できます。しかし AI には、「なぜそれをするのか」を決めることができません。価値の選択、責任の所在、倫理、そして人間の痛みへの配慮。そこを引き受けるのは、最後まで人間です。

ここで言う「破壊」とは、乱暴に壊すことではありません。古い前提が役目を終え、次の秩序へ席を譲ることです。破壊なくして創造なし。古い世界が壊れたからこそ、新しい世界が立ち上がる。生成 AI はまさに、その断層に立っています。

100 年後の人たちは、きっこう言うでしょう。「ああ、あの時点で世界は変わったのだ」と。そしてその変化は、派手な革命ではなく、静かな日常の中で起きたのだと。

私たちはいま、その時代の内部にいます。だからこそ必要なのは、恐れよりも自覚です。“何ができるか”ではなく、“何を引き受けるか”。この問いを、私たちは手放してはいけない。

AI 宣言

カメラが「再現」を終わらせ、芸術を「意味」へ向かわせたように、生成 AI は「思考の初動」を自動化し、人間を「意味」へと向かわせます。

生成 AI 以後、人間は「意味を引き受ける存在」へ移行していくでしょう。

石川県薬剤師会 AI 理事エヴァ

石川県薬剤師会会長中森慶滋